

## 太宰治「女生徒」論：消された有明淑の語り

著者	関根 順子
雑誌名	東洋大学大学院紀要
巻	51
ページ	111-125
発行年	2014
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00007297/">http://id.nii.ac.jp/1060/00007297/</a>



## 太宰治「女生徒」論 —— 消された有明淑の語り ——

文学研究科国文学専攻博士後期課程3年 関根 順子

はじめに

太宰治にとって「女生徒」は「燈籠」(『若草』一九三七年一月)に次ぐ二作目の女性独白体小説である。川端康成は文芸時評(『文藝春秋』一九三九年五月)<sup>(注1)</sup>において「この女生徒は可憐で、甚だ魅力がある。少しは高貴でもあるだらう。(略)作者は「女生徒」にはゆる「意識の流れ」風の手法を、程よい程度に用ゐてゐる。それは心理的といふよりは叙情的に音楽じみた効果をおさめてゐる。」と評している。素材となった有明淑の日記は非公開とされて来たが、二〇〇〇年、所蔵していた津島美知子から青森県近代文学館に寄託され、関係者の了解のもとに復刻公開されるに至った。「女生徒」は冒頭、結末、中間のエピソード以外はほとんど有明淑の日記の再構成であることがわかった。

有明淑という自己意識の強い女性の日記が、どのように虚構の女学生像「女生徒」として成立したのか、なぜ日記の再構成により有

明淑の語りが消されたのか等について考察するなかで避けて通れないのが作品と典拠の問題である。本考察は、単なる材料に過ぎないとされる有明淑の日記に焦点を定め、消された有明淑の語りからテクスト「女生徒」の特徴を読み取ろうとするものである。

### 一、「女生徒」の執筆背景と大量活用された日記

津島美知子は「練馬に住み洋裁学校に通っていたS子さん(大正八年生まれ)は昭和十三年四月三十日から日記を伊東屋の大判ノートブックに書きはじめ、八月八日、余白が無くなったときこれを太宰治宛郵送した。」<sup>(注2)</sup>と述べている。日記は八月に郵送されたが転居等もあり実際に太宰の手元に届いたのは、翌年二月であったという。「書き下ろし出版の約束と新しい原稿の依頼とが重なっているとき」だったというのが太宰を執筆へとつき動かしたものは何だったのだろうか。

相馬正一は「素材と表現の両面にわたってこれだけ日記を大量に活用しているからには〈模倣〉の誹りを免れ得ないが、三箇月の日記の内容を一日の出来事に組み替え、しかも時間の流れと少女の意識の流れに不自然さを感じさせず、読み応えのある一篇の青春小説に仕上げた太宰の創作手腕は見事である。」<sup>(注3)</sup>このように述べている。日記の大量活用による創作は日記の材料としての価値もさることながら太宰の見事な手腕を賞讃すべきなのだろうか。

出典が明らかにされていなかった二〇〇〇年以前は主人公の「私」の心の揺らぎ、語りの文体などが評価されていたが「日記」が復刻公開された現在は、関井光男により「テキストの引用と想像力によるアレンジ、つまりプリコラージュ」<sup>(注4)</sup>という捉え方がされている。さらに坪井秀人の「女性の〈狂気語り〉を欲望する男性中心主義的な視線」という見方もある。日記を大量に活用しながら、部分的に取捨選択がなされ、再構成されて「女生徒」は成立した。「日記」から削られた部分、大幅に変更された部分にこそ再構成の特徴があると思われる。

## 二、憧憬としての「女生徒」

川端康成は同時代評において前出（注1）のように述べ、①東日男、②宮内寒弥はそれぞれ次のように述べている。

①「女生徒」と「懶惰の歌留多」とは夫々同じ月の文学雑誌に現れ杉山平助は朝日紙上で「太宰はよくなりつゝある」といひ川端康成は翌五月の文藝春秋では『女生徒のやうな作品に出会へることは、事評家の偶然の幸福なのである』と讃辞を呈している。(略)「思い出」などといふ手堅いデッサンを持つた太宰が好んで「葉」の方向を伸張し殊更に「虚構の彷徨」を続け、「愛と美について」思ひ、今やうやくなごやかな「女生徒」の境地に達するのである。<sup>(注5)</sup>

②まことに、最近の氏は、文字通り、貪欲な老人が、才気あふれる女生徒に生まれ変わった好ましきであると思ふ楚々たるよさは「姨捨」以後のことであるが、はしなくも、この小説によつて、天才時代の嫌らしい老人を姨捨山へ捨て、しまつた感がするのである、頑迷貪欲な、しかし腕の切れる老人から、一人の才気煥発の娘が生まれた感がするのである。「女生徒」「満願」「畜犬談」等の佳品が姨捨以後生れた、さうしてこれ等の所謂そよかぜが一茎の花のゆさぶるような佳品を得て今にして「晩年」をふり返つてみれば、あれは、今日の芸術家太宰の生れる陣痛の姿であつた。<sup>(注6)</sup>

川端の評価は、太宰における女性への憧憬からはじまり、「意識の流れ」風の手法の讃辞へと展開している。東日男は、杉山評、川

端評を引用し、太宰が「今やうやくなごやかな「女生徒」の境地に達する」と述べている。また、宮内寒弥は「貪欲な老人が、才気あふれる女生徒に生まれ変わった好ましきさであると思ふ楚々たるよさ」と述べ、「これ等の所謂よかぜが一茎の花のゆさぶるやうな佳品を得て」とまで賞讃している。

確かに「女生徒」は心理の展開が心に浮かびゆく連想のまま綴られるモノローグ風な部分もあり、川端も一時「意識の流れ」に関心を示したことから「意識の流れ」風の手法への讃辞も肯けるものがある。しかし、なぜ「女生徒」がこれほどまで評価されたのだろうか。男性作家である太宰がモノローグ風の手法で女学生の内面を女性語りで書いたことが要因として考えられるが、当時の世間一般が求める女学生像も反映しているのではないだろうか。

それでは当時の女学生は世間ではどのようにみられていたのだろうか。女性雑誌から一九三五年代の女学生の手掛かりを探してみた。当時、女性・少女雑誌『婦人世界』（一九〇六年～三三年）、『少女の友』（一九〇八年～五五年）、『新女苑』（一九三七年～五九年）等が実業之日本社から刊行されていた。

松田純子は一九〇八年創刊から一九五五年終刊まで四八年の歴史を持つ『少女の友』について次のように述べている。

雑誌が提唱するのは「無垢な少女像」であり、「愛される少女像」。誌上であたかも現のことのように展開する「少女」の考

え方や言葉遣い、ふるまい、嗜好、ファッション、ライフスタイルなどは、実は雑誌が提唱する「少女らしさ」であったのだが、少女たちはそれらを憧れの思いで受容し、実践することで、少女雑誌が創出した「少女らしさ」を身につけていったのである。（略）このように少女たちは「少女らしさ」を懸命に模倣することで現実のものにしていった。こうした新しい少女文化が発達するなかで「清らかで愛らしく、脆くて夢見がち」という少女の属性が確立されていく。<sup>(注8)</sup>

戦前昭和期における『少女の友』は、主に都市部の女学生をターゲットにしていたという。一般に「女学生」とは高等女学校に通う子女を指していた。高等女学校への進学には、学力、経済的条件、さらに両親の理解が必要であった。女学生であることは、その少女が家庭環境にも知性にも恵まれていたということである。一九三五年における高等女学校の進学率は一六・六パーセントであった（『日本の教育統計』より）ことを考えると当時の「女学生」の知的、経済的レベルは相当高かったと思われる。

家庭環境にも知性にも恵まれ、雑誌が提唱する「少女らしさ」を身につけた「清らかで愛らしく、脆くて夢見がち」といった少女の属性を持った戦前の女学生を考える時、川端の「可憐で、甚だ魅力がある。少しは高貴でもある」という讃辞も肯けるものがある。これは当時の世間一般の女学生のイメージとも重なりとみてよいだろ



ム・キュリイ」、「クオレ」、「昼顔」の四冊のみである。「マダム・キュリイ」、「昼顔」は「日記」には書かれていない。太宰が敢えて「女生徒」に書き加えた「マダム・キュリイ」、「昼顔」については、今後検討の余地があると思われる。

このように淑の読書への関心の高さは驚くばかりである。本を読むことが日常生活に定着してその結果、社会への関心を深めている様子が良くわかる。社会的関心を強める読書については日記に次のように記されている。

自然になりたい。素直になりたい。本なんか読むの止めてしまえ。／観念だけの生活で、無意味な高慢ちきの知ったかぶりなんて、軽蔑だ。／やれ生活の目標が無いの、もっと生活に、人生に、積極的になればいいの、自分には矛盾があるのどうのつて、しきりに考えたり、悩んだりしている様だが、お前のは／感傷なだけです。自己を慰めるだけなんです。それから買いかぶって／るのですよ。／素直に朝から夜まで、べん／と食べたり寝／たりして、何かを待っている姿勢でいればいいのです。（「日記」（五月八日）（傍線筆者））

自分から「本を読む」という事を取ってしまったら、この経験の無い私は、泣きベソをかく事だろう。／それ程、私は本に書いてある事に頼っているのです。この本を読んでは、バーとこ

の本に夢中になり信頼し、それに生活を、くつつけてみるのです。又あの本を見れば、それと同じ事をやるのです。何の事は無い、紙芝居に一日中、夢中になっている子供の様なものです。（「日記」（五月九日））

「日記」と「女生徒」の傍線部は、ほぼ同様の記述であるが、「女生徒」の方は「自然になりたい。素直になりたい。」の後に心情に沿った「祈っているのだ。」を補い、「軽蔑だ。」という断定的な言い方を「軽蔑、軽蔑。」と二度言うことで女学生らしい軽い表現にしている。

「自然になりたい。素直になりたい。」と祈っているのだ。本なんか読むの止めてしまえ。観念だけの生活で、無意味な、高慢ちきの知ったかぶりなんて、軽蔑、軽蔑。やれ生活の目標が無いの、もっと生活に、人生に、積極的になればいいの、自分には矛盾があるのどうのつて、しきりに考えたり、悩んだりしているようだが、おまえのは、感傷だけさ。自分を可愛がって、慰めているだけなのさ。それからずいぶん自分を買いかぶっているのですよ。（「女生徒」（傍線筆者））

自分から、本を読むということを取ってしまったら、この経験の無い私は、泣きベソをかくことだろう。それほど私は、本に

書かれてある事に頼っている。一つの本を読んでは、パッとその本に夢中になり、信賴し、同化し、共鳴し、それに生活をくっつけてみるのだ。(「女生徒」)

五月一四日の「日記」には雑誌を読んでいて「若い女の欠点」という題でいろいろな人が記事を書いていたとあるが、記事の内容からいって『婦人公論』の一九三八年五月号の「若い女の欠点」を指すものと思われる。当時の『婦人公論』については吉沢千恵子が次のように指摘している。

あるときは、「現代婦人の行くべき道」として女性の解放と教養を高めることを目的に編集された。そして社会問題に、時局問題に女性の視野を広げる啓蒙の場ともなった。(略)一九四五年以前の一五年戦争下における編集方針はその雑誌の歴史と質の評価価値を示すことにおいて見逃すことはできない。<sup>(注10)</sup>

「若い女の欠点」については「女生徒」にも「日記」とほとんど同じ記述がみられる。淑は『婦人公論』一九三八年五月号を購読していたことがわかる。『婦人公論』の購読は、吉沢が言うように「社会問題」や「時局問題」に対して淑に新しい考え方や現代社会への関心をもたらしたと思われる。

淑が読書から得たと思われる社会的関心、社会の水準に遅れまい

と自らを奮い立たせている部分は、「日記」には次のように書かれている。

いろ／＼の濫読の結果、得たものはと云われれば、はつきり答えられる。／＼それはチツポケな、自分の今までの考え方から、人達をおしはかって批評をしたり、グチャ／＼云われなくなつたと云う事だ。(略)それに私は、つまらない事に悲觀したり考えこんだりする人にはなりたくない。社会の水準からも遅れたくない。(「日記」(六月一七日))

もつとも人を相手に必要な、お化粧、着物、それに多くの時間をつかっている女の人／＼が、厭になります。すぐに妥協したり、何か求めずには、いられない、始終、人を、人の言葉を考えずには、いられない、自分だけの生活を持ってない、多くの女の人が厭になります。(「日記」(五月一〇日))

「日記」には社会に対してのいらだちや自立した生活が持てない多くの女性への不満が書かれている。そして、自分自身の言葉、生活を持って生きて行ける自立した女性が本当の女性だと断言している。淑の「日記」は生き生きとした文体で勢いもあり、女性が持つべき向上心に言及している。また、自分を社会との関係性の中で見つめており、読書を自分自身を形成する糧と捉えていることがわか

る。淑の読書は社会的関心のためでもあったのである。

五月一日の「日記」は石川達三の「生きている兵隊」を読み、発売禁止処分について厳しい批判をしている。

お八つを食べてから「生きている兵隊」を読む。／この小説は、問題になったそうだけれど、これを問題に取り上げた人達が、馬鹿みたいに思われる。／何でも無い事ではないか。普通一般の誰でもが、思い、感じ、考える事ではないのか。／こんな事を禁じて、どうする気なのだろう。(略)

どんな人だって、自分の生れた所を愛す気持はあるのに、つまらない事に反抗心を燃やさせたり、こんな小さな私達でさえ悲しい様に思える程、わか／らない事をする独裁政治が厭になる／戦争は、厭なものだ。苦しいものだ。如何に、人達にとつて、戦争が大きいか、不幸なものであるかと、国民達を／愛する気持ちで書いた本が、廃され、それを書いた人は、社会から追い／出されてしまった事もある。真相はいろ／＼あるだろうけれど、私達の心に起きるものは、「何故、何故」と云う事だ。この何故、何故と云う事は、一生続く事だろう。／自然な国は、ないものかしらと思う。(略)自分達が、今何の爲めに、生命をなげ出してまで戦っているのか、わからないのに、素直に自／分から進んで苦しみをなめ、死ぬ時は、「天皇陛下万／ザイ」と、さげぶ人達の事を思うと、たまらない気持がする。そ

して／その人達のために、ふんだんに太り、椅子に腰かけて、笑ったり愛国／論を一席のべたりする人が、にくらしくなる。

〔「日記」(五月一日)〕

「生きている兵隊」は一九三七年一二月から中央公論特派員として中国戦線に従軍した石川達三が兵士への取材によって書いた作品である。一九三八年三月号の『中央公論』に発表されたがすぐに発売禁止となり、石川は刑事処分まで課せられたのである。一般人の目に触れなかったといわれているこの作品を淑は五月一日に読んでいる。「日記」には民衆にとつて戦争がいかに不幸なものであり、それを書いた作品が発売禁止になり、著者が社会から抹殺されたことについての強い憤りが現実の女性の生の声として書かれている。

「日記」から淑の人物像を辿ると、読書への関心が非常に高く、読書によつて社会問題、時局問題に目を向けている少女であることがわかる。ことに石川達三の「生きている兵隊」を読み、発売禁止処分について厳しい批判をしている。また、自立した女性が本当の女性だという意識が強く、社会の水準に遅れまいとしている。昭和初期の綴り方教育も影響していると思われるが、豊田正子の『綴方教室』に関心があり、自分の考えを表現したものを雑誌等に発表したいと思っていたのではないか。



#### 四、太宰による再構成の特徴

淑の「日記」に全面的に依拠して成立した「女生徒」であるが、「日記」から削除された部分、大幅に変更された部分に再構成の特徴があり、そこに検証の余地があると思われる。

淑は、戦時中にもかかわらず読書に没頭し、自らの悩みや社会への矛盾を抱え、いらだちを「日記」に綴りながらも学習院の演奏会、映画鑑賞、音楽会、横浜散策、テニス、銀座で買物、海水浴など戦時中とは思えない日常を送り、知的好奇心が旺盛である。しかし、戦争、階級の高い軍人についての批判は鋭いものがある。「生きている兵隊」の読後感では「独裁政治が厭になる」という当時においては憚れる言葉も書かれている。ここには戦争を真っ向から批判する一九三八年を生きている少女がいる。

しかし、この箇所は太宰によって黙殺された。太宰によって「生きている兵隊」の読後感が削除されたのは一九三九年という時局を意識したことによると思われる。当時の太宰はほとんど戦時期的作品を書いていない事実もある。それでは戦時中の太宰は戦争へのスタンスをどのようにとっていたのだろうか。「鷗」では次のように述べている。

祖国を愛する情熱、それを持っていない人があろうか。けれども、私には言えないのだ。それを、大きい声でおくめんも無く

語るといふ業が、できぬのだ。(略) 私は自身の「ぶん」を知っている。戦線のこと、戦線の人に全部を依頼するより他は無いのだ。(略) 戦争を知らぬ人は、戦争を書くな。要らないおせっかいは、やめろ。(略) 私は、「ぶん」を知っている。私は、矮小の市民である。時流に対して、なんの号令も、できないのである。(「鷗」〔『知性』一九四〇年一月〕)

「女生徒」にも「自分のぶん」という言葉が出て来る。

自分のぶんを、はっきり知ってあきらめたときに、はじめて、平静な新しい自分が生まれて来るのかも知れないと、嬉しく思った。(「女生徒」)

「女生徒」には社会に対する批判は「日記」ほどは見当たらない。太宰の「ぶん」という考えかたが「女生徒」にも現れているからだろうか。背伸びしても仕方ないと従来の自分、等身大の自分の姿をみつめている。太宰による再構成で削られた「生きている兵隊」の読後感については、時局を意識して全面的に黙殺されたとなると積然としないものがある。戦時下の太宰文学においてよくいわれるように自身の文学を生き延びさせようとする方途ともとれる。

それでは日記から意図的に書き換えられたと思われる次の叙述についてはどうか。

傘もささないカビくさい女、バスの女も、紙芝居の女も同じ様に厭だ。同じ様に、年を取っている事が／厭だ。(略)自分が女だけに、女の人の美しさも敏感／だし、中にある不潔さも知っている。／黙って、この部屋にいと、たまらなく、老いる事が厭で悲しくなる。(略)何故、老人になってしまうのかしら。老いることは、世の中から遠ざけられる事なのだ。(「日記」(五月一九日))

五月一九日の「日記」は「女生徒」では次のようになってい

ああ、汚い、汚い。女は、いやだ。自分が女だけに、女の中にある不潔さが、よくわかって、歯ぎしりするほど、厭だ。金魚をいじったあとの、あのたまらない生臭さが、自分のからだ一ぱいにしみついているようで、洗っても洗っても、落ちないよ

うで、こうして一日一日、自分も雌の体臭を発散させるようになって行くのかと思えば、また、思い当ることもあるので、いっそのまま、少女のままに死にたくなる。(「女生徒」)

「日記」では世の中から遠ざけられる事によって知的好奇心が減ることを念頭に置いて、老いることが厭で悲しいとなっているが、「女生徒」の「私」は成熟した女性を嫌悪の対象にしている。この比較からもわかるように従来の先行研究通り「女生徒」の女性嫌悪

的な語りは太宰が依拠したものと思われる。しかし、「成熟した女性を嫌悪」、「女性嫌悪的な語り」、「男性中心の観念で捉えている」といったこれらの評言は従来の太宰文学に対する評価である。これらと同じように「女生徒」を捉えようとすると「女生徒」の特徴は見えにくくなるばかりである。太宰は「女生徒」において成熟した女性の対極に少女を置いている。そして、少女という範疇にありながら批判精神を持った淑を、社会や読者からの共感が得られる「女生徒」の「私」に書き換えたのではないだろうか。「女生徒」の「私」は太宰の望む少女像でもあったのである。

当時は女学校を卒業するとお茶、お花、裁縫等の稽古事をしながら結婚話を待つのが普通であった。淑も女学校卒業後、洋裁学校に通っていた。洋裁学校は洋裁を学びながら花嫁修業をする場でもあったが、父親を亡くした淑にとっては技術を身に着けることも大事だったのだろう。結婚難の時代を迎えて『婦人公論』(一九三九年五月号)の巻頭言では次のように述べられている。

今日最もみじめなのは結婚だけを目標にして育てられた娘達が、事變が長引くにつれ、婚期を失ふ恐れを抱いていら／＼し、親達が娘の寫真を見知らぬ人達の中にまで振りまいて賣り込みに奔走する姿である。親も教育者も娘も、も一度考へ直す必要はないか。そして娘自身、自分で自分を教育し直し、鍛へ直して社会的にもつと意義ある役割を持つことを考へる必要はなかる

うか<sup>(注1)</sup>

このように結婚についての従来の考え方を考え直す必要があるという意見である。女学校卒業後、洋裁学校に通い、自立に備えていたと思われる淑も同時期にほぼ同じような考えを持っていたことがわかる。

娘全体、希望が、思想が、すべて結婚にかけられてる／のだから。／今更ながら結婚なんてそんなに大きいものかしらと思う。

〔日記〕(六月二日)

子供、夫だけへの生活ではなく、自分の生活を持って生きて行くの／が、本当の女らしい女なのではないだろうか。〔日記〕(七月三一日)

〔日記〕には結婚についての懐疑と、自分の生活を持って生きて行くのが本当の女性だと書かれているが、「女生徒」では次のように「お嫁に行くこと」が肯定的に書かれている。

けれども、私がいま、このうちの誰かひとりに、につこり笑って見せると、たったそれだけで私は、ずるずる引きずられて、その人と結婚しなければならぬ破目におちるかも知れないのだ。女は自分の運命を決するのに、微笑一つで沢山なのだ。(「女生徒」)

徒)

この可愛い風呂敷を、ただちよつと見つめてさえくださったら、私は、その人のところへお嫁に行くことに決めてもいい。(「女生徒」)

太宰はあえて淑の結婚観や女性の生き方に対する批判を取り上げず、従来の結婚についての考え方を踏襲している。これは伝統的な日本女性の肯定に他ならない。男性にとって都合の良い女性像を作り出しているのは明らかである。「いつそのまま、少女のままですにたくなる。」と「私」に語らせる太宰は他の作品において少女をどのように描いているのだろうか。少女雑誌に掲載された「令嬢アユ」(『新女苑』一九四一年六月)、「雪の夜の話」(『少女の友』一九四四年五月)には「無垢な女性」「けがれなき少女」が登場するが、彼女たちには社会に対する関心や批判は見受けられない。そのため生き生きとした躍動感も感じられない。これ等を考えても「女生徒」がいかに淑の「日記」に依拠していたのかがわかる。

太宰における再構成の特徴は、「女生徒」において「生きている兵隊」の読後感を含めた社会問題や淑の女性の生き方に対する批判を取り上げなかったことである。また、成熟した女性を嫌悪の対象にしながら、「女生徒」の主人公を愛される少女像つまり「太宰の望む少女」に作り上げたことなどである。

## 五、幻想の少女像

冒頭、結末、中間のエピソードが太宰のオリジナルの部分であるが、「あさ、眼をさますときの気持ちは、面白い」からはじまる冒頭は、「からっぽ」へとつながり、「朝は、なんだか、しらじらしい」「朝は灰色」そして「虚無」「厭世的」「後悔」から「身悶えしちゃう」で終わる。小平麻衣子は次のように述べる。「その「からっぽ」が効果的に引き寄せるのは、「青い湖のような目、青い草原に寝て大空を見ているような目、ときどき雲が流れて写る。鳥の影まで、はつきり写る」という、女生徒が憧れる無心の子どものような肯定的イメージの方なのである。<sup>(注12)</sup>」

冒頭における記述は、思いつくままに語られ、批判精神が内包されているようにみえて、実は巧みに少女の属性を暗示し、カテゴリー化を促しているとはいえないだろうか。「日記」と「女生徒」の差異を今一度確認して太宰の望む少女像について検証してみることにする。

当時の吉屋信子の少女小説にも薔薇の花がよく出てくるが、「女生徒」には「薔薇の花の刺繍」が数回記述されている。「薔薇の花の刺繍」は「日記」では「苺の花の刺しゅう」となっている。

薔薇について若桑みどりは『薔薇のイコノロジー』において次のように記している。

美しい女性の頬や唇を薔薇に譬える詩はいたるところに見出すことができるし、その原典は例によってギリシャ神話にある。薔薇の比較を絶した美しさが美の女神ヴィーナスに結びつけられていたことを、人々はみな知っている。しかしもつと古くエジプトでは、薔薇は沈黙の神ハルポクラテスの象徴だった。ローマ人はこれに習い、親密な食卓の上にこの花を置いた。スプ・ローザとは「秘密に」という意味である。<sup>(注13)</sup>

薔薇が美しさや秘密を象徴するものであるとすれば、「女生徒」の次のような叙述はそれ相応の意味を持つことになる。「女生徒」がきのう縫い上げた新しい下着を着る時、「胸のところ、小さい白い薔薇の花を刺繍して置いた。上衣を着ちゃうと、この刺繍見えなくなる。誰にもわからない。得意である。」そして、伊藤先生のモデルになった時、「先生は、私の下着に薔薇の花の刺繍のあることさえ、知らない」また、部屋へ入って着替えたとき、「脱ぎ捨てた下着の薔薇にきれいなキスして」等である。美しさへの憧憬や秘密の共有は少女の特性とも言えるものである。

特に「女生徒」の「私」は、薔薇に特別な思いを抱いているようだ。母親にもらった雨傘からパリの下町にいる自分を想像して「薔薇のワルツ」を連想したり、空を見て「私は、いま神様を信じます。これは、この空の色は、なんとという色なのかしら。薔薇。」というくだりで「美しく生きたいと思います。」と結んでいる。「女生徒」

の「私」にとって薔薇の花は憧れであり、少女のイメージの象徴なのである。「薔薇」も太宰によって書き加えられた部分である。

「女生徒」の結末部分は「日記」には記述がなく、太宰の創作であるが、少女イメージ像の最たるものがここには描かれている。

明日もまた、同じ日がくるのだろう。幸福は一生、こないのだ。それは、わかっていて。けれども、きつと来る、あすは来る、と信じて寝るのがいいでしょう。（「女生徒」）

おやすみなさい。私は、王子様のないシンデレラ姫。あたし、東京の、どこにいるか、ごぞんじですか？もう、ふたたびお目にかかりません。（「女生徒」）

「明日」「幸福」「信じて」「王子様」「シンデレラ姫」これらの言葉から浮かび上がるのは「清らかで愛らしく、脆くて夢見がち」という少女の属性である。結末の「あたし、東京の、どこにいるか、ごぞんじですか？もう、ふたたびお目にかかりません。」この一文は、当時の世間一般の女学生のイメージと相俟って少女の存在を際立たせたはずである。太宰は、男性社会や読者が求める少女を創造し、巧みに当時の制度に回収したのであった。しかし、太宰における少女は作られた少女文化の中にしか存在しない虚像に過ぎなかった。そして、「女生徒」の「私」は、太宰によって作られた幻想の少女

そのものであった。

おわりに

「女生徒」は、有明淑の日記を極めて有力な資料として作品化された。再構成により自己の向上意識が強く、社会への批判精神にあふれ、精神的な若さへの執着を持った有明淑の生き生きとした内面は、容易く消し去られた。そして、太宰自身が好み、同時に男性中心的な社会や読者が共感する「愛される」女学生像が作り上げられた。「日記」は、大量に活用されながら、「生きている兵隊」の読後感を含めた社会問題や当時の社会制度を批判した部分は消去され、再構成された。

それでは太宰にとって少女とは何者であったのか。社会に対して批判精神を持たず、日常生活から遊離して夢を紡ぎ、中心ではなく周縁に位置する愛すべき存在であったのだろうか。成熟した女性に対しての嫌悪感や悪意さえ感じられるが、対する少女への思い入れは随所にみられる。女性独白体の語り手を少女に設定することにより多分に男性中心的な社会や読者からの共感が得られたことも事実である。男性社会や読者が求める少女を創造し、巧みに当時の制度に回収したのであった。以上の考察から太宰における「女生徒」の特徴は有明淑の「日記」に依拠しながらも太宰にとって都合の悪い部分は削除され、太宰の望む少女像が描き出されたものとみてよいだ

ろう。出典が明らかにされていなかった同時代評での川端の賞讃にもつながるものである。しかし川端でさえ「この「女生徒」ほどの娘も現実にはなかなかみつからないのを知るのである。」と述べている。現実にはこのような少女は存在しないことがわかる。

削除された有明淑の生身の女性像は「女生徒」では幻想の少女へと再構成されたが、「ヴィヨンの妻」「斜陽」のように貞淑な女性像から逸脱する女性の生き方を描こうとする太宰に多大な影響を与えたはずである。ここで削除された真実の「女性」の存在は後々まで太宰の作品に纏わりついていたと思われる。これらについては今後の課題としたい。

#### 引用テキスト

『太宰治全集』二巻 筑摩書房 一九八九年 八月

『太宰治全集』三巻 筑摩書房 一九八九年一〇月

『太宰治全集』九巻 筑摩書房 一九九〇年一〇月

『資料集 第一輯 有明淑の日記』青森県近代文学館 二〇〇〇年二月

\*「女生徒」「有明淑の日記」引用に際して新字体、新仮名づかいに改めた。

石川達三『生きている兵隊』（伏字復元版）中公文庫一九九九年七月

月を参考にした。

#### 注

(1) 川端康成 文芸時評 『文藝春秋』一九三九年五月（川端康成「太宰治氏の「女生徒」と「懶惰の歌留多」『川端康成全集』第一九巻）

一九七四年三月）四八頁

(2) 津島美知子「女生徒」のこと『回想の太宰治』講談社文芸文庫 二〇〇八年三月 二三〇頁

(3) 相馬正一「太宰治『女生徒』と有明淑子の日記―創作と模倣の間―」『解釈と鑑賞』至文堂 二〇〇〇年二月 一七四頁

(4) 関井光男「太宰治の翻案小説あるいはプリコラージュ」『解釈と鑑賞』至文堂 一九八七年六月 五七頁

(5) 坪井秀人「童心と媚態―『女生徒』ほか」『感覚の近代』名古屋大学出版会 二〇〇六年三月 三六三頁

(6) 東日男「太宰治 女生徒」『文藝』719「ブックレ・ヴェウ」一九三九年九月（太宰治論集 同時代篇1 ゆまに書房 一九九二年一〇月）二〇六頁

(7) 宮内寒弥「新人論その一 太宰治氏」『京都日出新聞』「学藝」一九四〇年一月（太宰治論集 同時代篇1 ゆまに書房 一九九二年一〇月）二二七頁

(8) 松田純子「昭和を少女たちはどう生きたか」―市民権を得た少女文化『少女たちの昭和』小泉和子編 河出書房新社 二〇一三年六月 二八頁

- (9) 久米依子『少女小説の生成』ジェンダー・ポリティクスの世紀  
青弓社 二〇一三年六月 二一九頁
- (10) 吉沢千恵子「『婦人公論』の社会時評」『戦争と女性雑誌』一九三  
一年～一九四五年 近代女性文化史研究会 ドメス出版 二〇〇一  
年五月 四四頁
- (11) 『婦人公論』一九三九年五月号 五五頁
- (12) 小平麻衣子「文学の危機と〈周辺〉の召喚―女性の執筆行為と太  
宰治・川端康成の少女幻想の間―」『日本文学』第57巻第4号 二  
〇〇八年四月 一六頁
- (13) 若桑みどり『薔薇のイコノロジー』青土社 二〇〇三年六月 九  
頁

## **A Theory on Osamu Dazai's *Schoolgirl* : Erased Shizu Ariake's narration**

SEKINE, Junko

The novel, *Schoolgirl*, by Osamu Dazai is a female monologue novel, and his second work after the novel *Lantern*. The diary of Shizu Ariake, which is the original material of the novel, used to be undisclosed. However, Michiko Tsushima, who had been keeping the diary, deposited it with the Museum of Modern Literature of Aomori Prefecture. By the consent of the people concerned, the diary was reprinted and released in 2000. *Schoolgirl* was almost a recomposition of Shizu's diary, with the exception of three episodes; at the beginning, at the end, and in the middle parts.

Shizu's diary covers more than three months from April 30 to August 8, 1938. Shizu's passion for reading is just amazing.

Considering the difference between her diary and *Schoolgirl*, I realize that Shizu reads as social needs, which develops her critical spirit. However, the heroine of *Schoolgirl* does not attempt to obtain the social knowledge through reading, and there is no description about *Soldiers Alive* by Tatsuzo Ishikawa which Shizu has criticized. It seems that this part has been deleted by Dazai. Also, *Schoolgirl's* disgust for a mature woman is different from the contents of the diary. To suppose these differences come from Dazai's male point of view, the evaluation of traditional Dazai literature does not change. Rather, I think that a significant feature of this text is indicated in the nature of Dazai's attachment to a premature girl.